

【書評】

西崎 緑 著

『ソーシャルワークはマイノリティをどう捉えてきたのか —制度的人種差別とアメリカ社会福祉史』

(勁草書房, 2020年, A5判, 260頁, 5,000円+税)

松倉 真理子
(福岡教育大学)

わたしたちは、彼女のほうに目を向けなくて彼女を見ようとし、けっして一度もそばには近づかなかった。彼女がおろかだとか、いとわしいからではなく、こわがっているわけでもなく、彼女を助けそなかったからだった。わたしたちの花は一度も芽を出さなかった。

Morrison, Toni (1970, 1994=1999) *The Bluest Eye*, Vintage

(=大社淑子訳 (2001) 『青い眼がほしい』早川書房)。

I. はじめに

本書は、アメリカにおけるソーシャルワーカーの専門職化と福祉国家形成のはざままで、周縁化され差別的扱いを受けてきたマイノリティ、特に黒人の側からソーシャルワークの歴史を再検討したものである。

これまで日本で出版されてきた「アメリカ社会福祉の歴史」の大部分は、いわゆる「ソーシャルワークの歴史」として語られてきた。先進国から専門的な理論や技法を学ぶという意味では、それ自体に一定の意義があったと言えるだろう。しかし、専門的な理論や技法を用いる「支援者の歴史」に目を向けることが、一方で、「対象者の歴史」を見えにくくしてきたと言うこともできる。

では、「対象者の歴史」からアメリカ社会福祉の歴史を照射することで、新たに見えてくるものとは何だろうか。それは、「生活困難な人々への支援を行う」ことを専門職としての第一目標にしてきたはずのソーシャルワーカーが、「黒人コミュニティの生活困難の根本的な原因である制度的人種差別の解決に努力しなかった」(p.3) というばつが悪いもう一つの現実である。

II. 本書の概要

こうした問題意識を序章で示した上で、第1章では、南北戦争による奴隷解放後のアメリカのソーシャルワーク前史が紐解かれる。奴隷であった黒人は、そもそも市民とは位置づけられておらず、主人にその運命が委ねられてきた。そうした土壌において、信仰覚醒を経験した人々による真のキリスト教的世界の実現に向けた取り組みは、倫理的問題として都市の貧困者を指導することや奴隷制度の廃止を進めるという意識はあっても、人種差別そのものに対する認識は希薄であったことが指摘される。

続いて、第2章では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、産業の発展とヨーロッパからの移民の流入という社会の急激な変化が生み出す問題に対抗するために誕生した初期のソーシャルワー

クの実態が論じられる。セツルメントやCOSを経て、他の専門職に比肩する社会的認知を得ることや「科学性」を追求することの必要性が痛感され、各地の教育機関において専門職養成が盛んに行われた。しかし、黒人の置かれた状況や人権侵害に対するソーシャルワーカーの意識は低かった。その救済や生活環境改善を担ったのは、黒人教会や黒人女性クラブ、そして全国都市同盟などの黒人による組織であった。また、この頃、黒人ソーシャルワーカーの養成が始まったことが資料とともに示される。

ニューディール以後、連邦政府が社会保障制度を整備して国民の面倒をみる福祉国家体制が整備された。第3章では、そうした中で増大した公的福祉部門がソーシャルワークの公民分担関係を作り出したが、実際は、黒人を始めとする底辺層を正式な「国民」のメンバーから排除する、選別的な福祉国家体制であったことが論じられる。また公的扶助が社会保障制度に組み込まれた一方で、戦時には兵士とその家族へのケアの需要が生まれ精神医学ソーシャルワークにその専門性が求められるなど社会情勢によってソーシャルワークに期待される役割が変化したこと、都市部での黒人人口の増加により人種問題が可視化されるようになったことが示される。

第4章では、冷戦期、パックスアメリカナとして世界の覇者を目指すアメリカと社会主義陣営との緊張感が増すのにもなって、ソーシャルワークはさらに政治的立場の変化を余儀なくされたことが論じられる。冷戦の社会不安が蔓延する中で、社会改良という大義は鳴りを潜め、専門ソーシャルワークは白人中流家庭を対象とする「豊かで幸せなアメリカ」を築くための「家族ソーシャルワーク」に傾斜していった。また、「赤狩り」に象徴される反共キャンペーンはソーシャルワーカーの活動内容の保守化を促したため、マイノリティを擁護することができなかったこと、人種統合に緩慢にしか対応できなかったことが指摘される。

第5章では、公民権運動や当事者運動など既存の社会秩序に抗議する機運の高まりによって、

当事者と専門職との間で生じた緊張関係について論じられる。また、ソーシャルワーカーが、貧困者やマイノリティの側に立って「共に闘う存在」へと脱皮していった経緯が整理される。「不正受給」「福祉依存」といった保守派の言説によって支援の縮小が相次いだことに対して、全米福祉権団体が結成されるなど当事者らによる福祉権運動が隆盛した。人権と自己決定、「人間としての扱い」を求めて、当事者自らが声をあげ政権と専門職を批判したが、長い間、白人中間層の価値観に馴致されてきた多くのソーシャルワーカーは戸惑いを覚え、「制度的人種差別」の解消は一筋縄とはいかなかった。そうした中、全米黒人ソーシャルワーカー協会の立ち上げや黒人ソーシャルワーカーの全米社会福祉会議での抗議行動が契機となり、養成機関のカリキュラムの中に人種差別問題を取り入れるなど、白人中心主義のソーシャルワーク界の体制全体に少しずつ変化がもたらされたことが示される。

以上、時代別にまとめられた5章からなる本文と巻末年表によって本書は構成されている。

Ⅲ. 評者コメント

以下では、評者の関心に引きつけた私見を記す。

本書の各章各時代を通して浮かびあがるのは、アメリカの社会福祉の歴史とは、畢竟、ソーシャルワーカー（支援者側）と、マイノリティや当事者（対象者側）との間の「すれ違い」（p.189）の歴史であったということである。「ソーシャルワーカーたちの関心を占めていたものと、それによって描かれる世界が、マイノリティ自らの知覚や展望に基づいて構成される世界とずれていた」（p.4）という一文に集約できる。「支援者の歴史」にばかりに目を向けることによって、私たちは何を取りこぼしてきたのだろうか。

「ソーシャルワーク誕生のときからすでに織り込まれたレイシズムとセクシズムの交差点」に位置するマイノリティ女性がアメリカの基本的構造によって苦難の生活に追いやられてきたことをと

らえることができず、結局、自助と相互扶助によって生き延びてきたという現実——を、私たちは学んでこなかった。つまり、政治参加、雇用、経済的地位、医療、教育、裁判など社会生活上の全ての場面で黒人を抑圧する社会構造としての人種差別（＝「制度的人種差別」）に基づいた分析から目をそらし、「マイノリティへの抑圧構造に対して結果的に加担、あるいは協力することになった社会福祉界の歩み」の批判的な考察を怠ってきたと本書は説く。

このような著者の問題意識を評者も共有したい。

アメリカの社会福祉の歴史を、「定番」となってきた白人中心主義による「ソーシャルワークの歴史」（大きな物語）としてではなく、黒人、女性などのマイノリティの立場に軸足を置き、政治や社会情勢などのマクロな背景も織り交ぜながら「ソーシャルワーカーが抑圧構造に加担した歴史」（もう一つの物語）という新たな視点を与えて仕切り直した点に本書の新味があると評者はとらえた。

しかし、これは「アメリカ」「黒人」に限った話ではないのではないだろうか。AFD バッシングの中での黒人のシングルマザーに押しつけられたステレオタイプは、例えば、現代の日本の生活保護受給者へのまなざしとよく似ている。多様な事情があるにもかかわらずことさら受給者の道徳的欠陥をほのめかす「いつもの」言説、それを擬えるような不必要な扶養照会や突然の家庭訪問など、「支援する側の論理」によってソーシャルワーカーが無自覚にマイノリティへの差別や抑圧構造を強化し続けている側面がないとは言い切れない。本書は、アメリカ社会福祉の歴史における黒人女性への差別をクローズアップすることを通して、時代や文化を越えて「支援をうけるマイノリティ」への関心はいつでも「支援する側の論理」に基づきがちであるという、ソーシャルワークの倫理にかかわる普遍的な問題を説いている。

このように自らの客観性を疑う知性を養うには、「支援する側の論理」だけでなく、支援される側から世界はどのように見えているのかを知る

うとすることが必要となる。本書は、それを「支援される側にとって、ソーシャルワーカーの取り組みは、果たして有益だと感じられたのだろうか」（p.190）と問うことであると述べる。そして、そのような努力をし続けることを忘れてはならないと、各現場で奮闘する現代のソーシャルワーカーたちに発破をかけているようにも思われる。

本書は、オーソドックスな文献研究の手法をとっているが、先行研究を踏まえることはもとより、各時代の「National Conference の年次大会主要トピックを毎年編集した Proceeding」から当時のソーシャルワーク界の関心や黒人観をピックアップすることに加えて、「人物史、回想録、オーラルヒストリー、新聞・雑誌記事、手紙や日記に記録された関係者自身の言葉」すなわち「白人ソーシャルワーカー、黒人ソーシャルワーカーそれぞれ自身の言葉で表現された思いの断片」（p.4）を拾い上げる緻密で膨大な作業の上に成り立っている。史資料の形態にとらわれず大小の史資料を整理し、関連付け、編みあげた力作であることは疑いようもない。

その上で、欲張りなリクエストが許されるなら、「一人ひとりのソーシャルワーカー（支援者）の言葉」だけでなく、当時の日々の生活の中から呟き、紡ぎ出された「マイノリティや当事者自身（対象者）の言葉」も聞いてみたい。社会福祉の歴史は、自らの生を否定された人々が絞り出した声なき声の系譜でもある。たとえば、第5章で言及された全米福祉権団体などの「当事者団体」の発行物などから、ADC/AFDC 受給者自らが綴ったテキスト（例えば、詩や歌詞、投稿されたエッセイなど）を拾い集めることも、史資料の形態、大小、硬軟合わせ飲むことのできる著者なら可能ではないだろうか。また、ブラックパワー運動の高まりに呼応して、黒人女性によって次々と発表された優れた文学作品は、フィクションとは言え、「二重の差別」体験に基づく当事者の世界が如実に展開される有効な手がかりとなると考える。まさに著者の述べる「マイノリティ自らの知覚や展望に基づいて構成される世界」観を浮かび

上がらせることで、当事者が社会やソーシャルワーク支援をどのようにとらえていたのかという追加の分析を心待ちにしている。

IV. おわりに

社会福祉という物語は、支援者のみによって紡がれるものではなく、「支援者の歴史」という大きな物語からこぼれ落ちる「対象者の歴史」、名もなき最下層の人々の物語を拾い集めたものとのポリフォニーであることが理想だと評者は考える。そのような文脈において、本書の展開に膝を打ちつつ拝読した。

何気ない日々の利用者との関わりや支援の記録は、積み重ねられることによって、COSが実践の科学化を追求したときもそうだったように、や

がて支援者側の物語として権力を孕み、ひいてはソーシャルワークの理論や社会福祉の歴史を作っていく。だからこそ、「誰が観察し、誰が記述するのか」、それが問題なのである。語りの不均衡が歪んだ現実を生みだしていないか、支援する側は常に意識を向けるべきである。

本書は、正しく歴史研究の書であるが、現場で日々利用者と関わる実践家に対しても、自らの支援を振り返るための大きな気付きを与えてくれるはずである。また、社会福祉やソーシャルワークの歴史を学ぶ人のみならず、昨今の“Black Lives Matter”の広がりからアメリカ社会や人種問題に興味のある人にとっても、これまでに見たことのないアメリカの一面を発見できるに違いない。